

Title	持続と系 : ベルクソニスムにおける物質観
Author(s)	小林, 照顕
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1999, 33, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10280
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

持続と系

— ベルクソニスムにおける物質観 —

小林照顕

I はじめに — 知性と幾何学的秩序

哲学にしる科学にしる、包括的な世界観は「系 *systeme*」¹⁾として提示されてきたのではないだろうか。プラトンのアイデアやアリストテレスの形相、近代形而上学の原理や科学の法則等々が、時間的継起において現れる変化・生成・運動を系の下に束ねていたのではないだろうか。系の立場では、アイデア・形相・原理・法則は実在と見なされてきた。それに対し、変化・生成・運動は、減少したもの・二次的なもの・流出したものであり、実在性が劣るものあるいは非実在として扱われてきたのである。逆にベルクソンに従えば、時間的継起（ベルクソニスムでは「持続 *durée*」）が実在として扱われ、アイデア・形相・原理・法則は時間的継起の抽象、より実在性の劣ったものと見なされる。つまり、ベルクソンは実在性に関し、時間的継起と系との地位の逆転を行い、持続の相の下に系を説明するのである。

まず、時間的継起の抽象や系の成立を支えるものが「知性 *intelligence*」であり、それらが「幾何学的秩序 *ordre géométrique*」の特徴を持つことを明らかにしておこう。ベルクソンは知性の影響の有無によって、「直接的知覚 *perception immédiate*」と通常の認識能力との間に区別を認める²⁾。直接的に知覚されるのは、持続する「流動する実在 *flux du réel*」であり、その中から通常の認識能力は、安定した様相や規則的様相を取り

出すが、その主要な機能が知性である (cf.1333-1336)。この知性の影響は、感覚を形成する知覚、概念を形成する思惟、法則を立てる理解といった多様な認識能力において認められる (cf.1335)。

知性の影響によって系は幾何学的秩序を持つ。具体的には、知覚に関しては、流動する実在から「質」や「物体」(748-750)を分割し、安定した様相が取り出される。質をそなえた物体は「形態」・「本質」で特徴づけられ、事象は言語や記号で固定され (cf.751)、規則的様相をとる。さらに知性は、分割・固定によって得られた安定した様相・規則的様相を用いて、元の流動する実在 (時間的継起) を再構成し (cf.753)、事象を理解しようとする。この再構成によって、流動する実在は原理・法則といった一定不変の関係へ (cf.776-777)³⁾、即ち安定した様相・規則的様相へ還元される。またその関係が原理・法則によって説明されるため、系は幾何学的秩序を持つのである。

Ⅱ 物体と精神の実体上の対立を回避する直接的知覚

時間的継起を軽視する系に対してベルクソンが批判的な態度をとったことを述べた。しかし系を成す科学も、実は物質の時間的継起を流動する実在 (持続) として扱っていないだろうか。科学という系の中でもある状態がその一瞬前の状態に依存することが認められるからには、そこにも時間は介入させられているのではないだろうか (cf.512)。

このような疑問に対し、ベルクソンは、「具体的時間 *temps concret*」(実在的時間 *temps réel*) と「抽象的時間 *temps abstrait*」との区別が立てられていない (cf.512) と批判する。抽象的時間は過去・現在・未来へと流れる具体的且つ実在的な持続ではなく、瞬間の連続でしかない、とベルクソンは主張する。系である物理学の理念とは「宇宙の中で物質点の系を孤立化させ、この各物質点の位置をある一定の瞬間に知られるようにし、

続いて我々が任意の瞬間にその位置を計算できるようにする」(789)ことである。それゆえ科学における時間は単なる「独立変数」(789)に過ぎず、この計算や測定のための時間とは「ある停止した瞬間」(513)でしかない⁴⁾。このような抽象的時間の世界とは、「瞬間毎に死んでまた生まれる世界であり、デカルトが連続創造について語った時に考えていたような世界に他ならない」(513)。系は「絶えず更新される瞬間的な現在の中にあり、過去が現在と合体するような実在的且つ具体的な持続の中にあるのではない」(512)。系の世界は連続創造説のようなそれ自体持続できない無力な世界であり、系の世界の抽象的時間は持続せず非連続であり、無力なのである⁵⁾。

以上のように幾何学的秩序を特徴とする系では、独立変数や瞬間でしかない抽象的時間しか認められず、持続する実在的時間は認められなかった。確かに、安定した様相・規則的様相を持つ物質やその変化は、我々の日常生活においてさえ法則に従い系に属すように見える。しかし同時に我々は物質の変化には持続を感じてもいる。このように二重の様相を持つ物質界に対し、従来の哲学や科学は系を重視し、系により多くの実在性を与えるか、系のみを実在と見なしてきたのである。では、持続を実在と見なしたベルクソンはいかにして物質という系を持続に還元するのだろうか。

問題を「物質に関する系の持続への還元」に絞って、一杯の砂糖水をつくる例を考えてみよう(cf.502,781-782,1262)。砂糖が水に溶ける物質的過程を科学が扱う場合、その過程の展開は任意の速さで一挙に展開される。というのも、この場合の時間が抽象的時間であり非連続であるために、一挙に展開されると想定されるからである。しかし現実には「私」は、砂糖が水に溶ける過程を強制的に待たされ、「待ち遠しさ」(502,782)を一種の実在的効力として感じる。これは砂糖の溶ける時間が連続的であり、一定の持続を占めると「私」に感じられるからである。ところが我々の「日

常の認識は、科学的認識同様同じ理由によって、やはり持続しない瞬間に持続を欠いた瞬間が継起している粉末にされた時間の中で、事象をとらえることを強いられている」(1363)。

ここで、「私」に認識された物質は非持続的であり、持続し待つ「私」との間に実体上の対立を引き起こさないのか、という疑問が起きよう。確かに、連続創造説では物質界という系やその抽象的時間は非連続であり持続しないために、持続する「私」との間に実体上の対立が起こってしまう。これは従来の哲学の難問であった、幾何学的秩序を持つ物質界と精神との実体上の対立でもある。しかしベルクソンは流動する実在と「私」との関係を直接的知覚によって保証し、日常の認識が直接的知覚の抽象であると理解することで、非持続対持続、物質界対精神という実体上の対立を回避していたのである⁶⁾。「一杯の水、砂糖、砂糖が水に溶ける過程、は確かに抽象であり、私の感覚や悟性によって全体の中から切り取られたものであるが、その全体は恐らく意識と同じような仕方で行進する」(502)。

すると、「物質に関する系の持続への還元」という問題は、ベルクソニスムにおいては、直接的知覚から通常の認識能力による日常の認識への抽象によって既に解決されていたことになる。本考察Ⅰで述べたように、この通常の認識能力の主要な機能が知性であったことから、むしろ新たに問題にされ説明を求められるのは、「知性による抽象」である。なぜなら物質界と持続する「私」との実体上の対立を引き起こした誤認は、知性の抽象の産物である安定した様相・規則的様相から起こったからである。

では、持続し流動する実在の世界から安定した様相・規則的様相を知性はいかにして抽象するのか(問題①)。また、安定した様相・規則的様相として抽出されていた物質は、流動する実在の中でどのように説明されるのか(問題②)。

これらの問題は避けられない。というのも、もし知性による抽象が完全

に作為的であるなら、「私」は砂糖が水に溶けることを強制的に待たされず、「待ち遠しさ」を感じることもないからである。また逆に、知性による抽象が我々の作為と全く無関係に決定的に行われる場合も、ベルクソンの説に反してしまう。なぜならこの場合の知性による抽象は、カントが述べるような決定的な「形式」や「カテゴリー」になり⁷⁾、直接的知覚（直観）自体、我々に不可能になるからである。すると直接的知覚の抽象としてベルクソンが認めていた「幾何学的秩序」の物質と、「私」との間につながりが見出されなくなる。物質と精神との関係は「予定調和」（669）を必要とするような実体上の対立に戻ってしまうのである。

Ⅲ 知性と物質性

本節では、先の問題①から採り上げていくが、まず、知性が抽象する物質の性質について調べる。流動する実在から知性が抽象する物質の安定した様相・規則的様相、即ち「物質性 *matérialité*」とは、ある位置を占める「空間性」と変化での「反復性」であると考えられる。というのも、物質的対象とは現在あるがままに止まり、それが変化する時にもそれ自体は変化しない諸部分相互間の移動をするものであり（cf.500-501）、物質的対象の変化は反復可能な諸部分の位置変化である（cf.501）、と述べられているからである。しかし、科学が扱うような物質、即ち「惰性的物質 *matière inerte*」（661）から知性について考察を始めることはできない。なぜなら、そのような物質は既に知性から完全な物質性（空間性・反復性）を与えられており、そのような惰性的物質からの考察は循環論を引き起こすだけだからである（cf.662-663）。このような循環論を避けるために、ベルクソンは知性と物質性の発生から考察を始める。

ベルクソンは、知性の扱いに最も適合しないものとして、純粹持続の様態をとる「我々固有の生に対し最も内的な点」である自我、即ち「緊張す

る *se tendre*」内的自我をまず採り上げる (cf.664-665)。知性の枠組みに完全に適合するのは「反復する事実」(665)であり、幾何学的秩序や非連続的な抽象的時間 (cf.本考察 I) であった。それに対し内的自我は全く逆の様相をとる。内的自我は過去の意識 (記憶) を取り集めて現在の意識に押し込め、それによって過去は現在に忍び込むことで現在を創造する (cf.664-666)。そのため、緊張する内的自我では、過去が現在に絶えず浸透し結びつくので、反復する事実 (状態) はどこにも見出されないのである。このような内的自我の「緊張 *tension*」は、過去と現在との瞬間的切断なしに結びつく持続本来の運動なのである。

しかし、過去を現在に押し込める緊張の努力を「中断 *interromper*」すると、自我は「弛緩 *détente*」状態に陥る (cf.665-666) という。この弛緩状態の極限では、「もはや実在的持続ではなく、死と再生とを無限に繰り返す瞬間でしかないような、絶えず再開される現在でできた存在」(665) が現れると述べられている。このように、緊張の中断によって弛緩が起こり、反復が現れるのである。この反復には、過去と現在との瞬間的切断が想定されることから、緊張の中断である弛緩は、持続本来の運動である緊張とは、反対方向への運動であると考えられる。

以上のように、自我が、その本来的運動である緊張と、その中断である弛緩、という二つの逆方向の運動を持ち、それぞれ異なった存在様相を持つことが明らかになった。緊張では過去と現在が浸透し結びつき、持続の性格が強まる。逆に、弛緩では絶えず再開される現在という反復が現れ、持続と反対の性格が強まることになる。ここから認識においても、緊張は内的自我といった心理的存在の方向に向けられ、弛緩は反復が認められる物理的存在 (物質性) に向いていると推測される。「一方では《精神性》の根底へ、他方では知解性 *intellectualité* を伴った《物質性》の根底への反対方向への二つの進行がある。精神性から知解性を伴った物質性へは、

反転 *inversion* によって……多分単に中断 *interruption* によって我々は移ることができるだろう」(665-666)。つまり、自我の弛緩が物質の反復性に適合し、知性の働きは自我の弛緩と同方向と見なされるのである。

反復性と同様のことが、物質の持つ空間性についても推測される。我々は事物の「延長 *étendue*」について、「拡がり *extension*」のある感覚⁸⁾を持つが、この感覚を衝動にして物質は、精神に延長の方向へと運動をたどらせる (cf.665-668)。この延長の方向への運動を精神自身がすすめた終極で、「純粹空間」という表象でしかない「図式 *schéma*」を精神は産み出す (cf.667)。もちろん、ベルクソンはこの純粹空間と物質とを同一視したのではない。確かに、物質では諸部分への分割が想定され、宇宙は孤立した系をつくるので、物質は空間性を持つと思われる (*ibid.*)。しかし、純粹空間 (完全な空間性) が完全な相互外在性・独立性を意味するのに対し、物質には相互作用が認められるがゆえに、「物質は空間内に自己を拡げるが、そこに絶対的に拡げられることはない」 (*ibid.*)。物質の諸部分は並列し分離しているように思われるが、各部分は全体の作用を受け、全体が部分に現前しているのである (*ibid.*)。

では、物質に認められる空間性はどのように考えられるのであろうか。「そのもの自体は変化せずに相互関係を変化させる (変質せずに《転位する》) 区別ある諸要素」や「純粹空間の諸特性」を我々が物質に認めてしまう理由は、「物質が暗示しているだけの方向の運動の終極に、我々がただ身を移していること」にある (cf.668)。つまり、最初、物質が精神にたどらせた延長の方向への運動を、精神が推し進めた結果、逆に精神から物質に適用される性格が、物質の空間性なのである。空間的に物質を認識するこの能力は「本質的に惰性的物質に向けられた精神の特殊な一機能」であり、この機能こそが知性であり、知性と物質は次第に相互適合しあい、最後にある共通な形態に定まる (cf.670)。さらにベルクソンは、この物質

が暗示する延長の方向は、我々の自我（精神）の弛緩と同方向であると推測する。なぜなら我々の精神は、物質を判明な空間で表象すると気楽になり、弛緩と同じ感情を持つからである（cf.666）。すると延長の考察でも、物質に認められる空間性は、最初物質が精神に与えた運動を採用する精神の弛緩から生じているのである。さらに、物質が最初に精神に与えた延長の方向へのこの運動は、物質へ抽象される以前の流動する实在が精神に与えた運動であるので、この運動も弛緩であると考えられる。流動する实在と自我の持続の弛緩、即ち持続という「同じ運動の同じ反転が、精神の知解性と物質性を同時に創造した」のであり、それによって「知性と物質との相互適応は自然に実現された」と考えられる（cf.670）。つまり、持続の弛緩、即ち緊張の中断という運動の一致で、知性と流動する实在の中の物質性は適合するのである。

IV むすびにかえて——ベルクソニスムにおける物質観

ところで知性の空間性は現実の物質の持つ延長の方向への運動を越えていた。ここから明らかなように「物質についての我々の知覚や、科学が与える認識は、相対的でもなく近似的に現れる」（670）。しかし物質の持つ空間性は知性の空間性と全く無関係でもなかった。流動する实在の中から物質が抽象されたのは、流動する实在の中に自我を弛緩させる運動（延長の方向への運動）があったからである。（流動する）「实在全体の中で部分的な中断や反転」（679）が起こっているからこそ、自我の弛緩は起こり、知性の抽象が始まるのである。この「实在全体の中で部分的な中断や反転」⁹⁾に沿って、直接的に知覚されていた流動する实在の中から、知性は自己の運動と一致する物質性（反復性や空間性）を抽象し、「知性と物質は次第に相互適合しあい、最後にある共通の形態に定まる」（670）。また、秩序とは主観と対象とのある一致であり、秩序は、精神が事象の中に自己

を再発見することなので(cf.684)、さらに知性は自己の運動に適合するように見出した物質を用いて、流動する実在全体を幾何学的に秩序付けるのである(cf.679)¹⁰⁾。

それでは、幾何学的秩序である科学の扱う物質ではなく、形而上学的な持続し流動する実在から見られた物質とは、どのように説明されるのだろうか。ここで本考察Ⅱで提起され残されてきた問題②(安定した様相・規則的様相として抽出されていた物質は、流動する実在の中でどのように説明されるのか)に答えることになる。これまで、知性と物質との漸次的適合の説明や流動する実在内から抽象される物質の説明に当たり、持続の「緊張」という形而上学的な運動概念を用いてきたが、この運動概念から物質はどのように説明されるのか。延長や延長を持つ物質の「拡がり extension」は「中断する緊張」と言われているが(cf.703)、流動する実在全体から見れば、拡がりは、実在全体という緊張の部分的な中断である。というのも、この「拡がり」が抽象されてくる基盤である流動する実在の持続自体、流動する実在自体の持続的創造、あるいはまったく新しい意味での「連続創造」であり、緊張を本来的運動とするからである。もちろんこの「連続創造」は持続的であるので、本考察Ⅱで採り上げた「連続創造説」の持続しない連続創造ではない。ベルクソニスムでは、流動する実在自体が持続的創造なのである¹¹⁾。「拡がり」として現れるのは、その創造行為という緊張の部分的な中断である。それゆえ、形而上学的な運動概念での物質の正確な表象は「壊れていく創造的動作」(705)と説明される¹²⁾。

注

ベルクソンの著作等からの引用・参照箇所はすべて、*Œuvres, édition du centenaire, P.U.F., 1991.* により、本文中にそのページ数を示す。

- 1) 本考察で「系」の語を用いるのは、その閉鎖性や普遍数学的・幾何学的性格を強調するためであり、開放的な「系」は射程に含まれていない。
- 2) 他の著作・論文では、「直接的知覚」は「直観 intuition」ともいわれ、「通常の認識」は「日常の認識」とも述べられている。
- 3) 例えば古代哲学は、変化・生成・運動を本来的ではない仮象や不完全態として見なし、アイデア・形相を本来的にとらえて事象を理解した(cf.755-773)。近代科学(cf.773-779)や近代形而上学(cf.785-795)も、古代哲学のアイデア・形相を科学法則や原理に置き換えたに過ぎない。
- 4) 抽象的時間とは逆に、実在的時間(持続)は元来流れるために、重ね合わせを前提とする数学や測定から逃れる。cf.1254.
- 5) 抽象的時間の無力さに対し、実在的時間は「はたらく agir」(1333)のものであり、実在的時間である持続には「一種の力 espèce de force」(782)・「実在的効力 efficace réelle」(782)・「効果 effet」(1256)が認められている。
- 6) ベルクソンは、幾何学的秩序と持続の二方向性は、デカルトの普遍的機械論と人間の自由意志論の二方向性に対応するように述べている。デカルトはただこの二方向性を追求せず前者を後者から説明しなかった、とも記されている。cf.787-788.
- 7) 本考察で「直接的知覚」と「抽象」と述べられているものは、ベルクソンのカント解釈の「物自体の認識である直観」と「形式」にあたる。このカントの「形式」とは、我々の作為の及ばない先験的で決定的なものである、とベルクソンは解釈したようである。ベルクソンのカント解釈には次のような行がある；「カントは、我々の認識の素材が、その形式からはみ出すことを信じなかった」(798)、「人間の思考能力は空間や時間の中に予め分散し、人間のために特に準備された素材についてはたらくのであり、物自体は把握されないし……物自体に到達するには人間の備えていない直観能力が必要である、ということをカントは確立した」(1269)。
- 8) 感覚は非延長的であり拡がりを持たない、という従来の心理学や哲学の見解を、ベルクソンは『物質と記憶』で批判している。ベルクソン自身は、感覚には拡がりがある、という立場をとる。この点については、『物質と記憶』第4章で扱われた、非延長な感覚と延長である空間との対立、という問題で論じられ、この問題は悟性の立てた誤謬に過ぎないとベルクソンは見なしている。cf.317-319, 344-352, 373-375.
- 9) 「反転は単なる中斷であろう」(666)と述べられている。意識の持続の反省では、弛緩から緊張へ、緊張から弛緩への二方向の反転が可能である。

しかし、流動する實在（世界）の物質では、持続本来の方向である緊張の中断が必然的に弛緩になるという一方向の反転しか認められていないようである。cf.666, 680, 681, 682, 684.

- 10) 「……物質は孤立的系を構成する傾向を持っており、この系は幾何学的に処理される。我々が物質を定義するのはまさにそういう傾向によってである。しかし、それは傾向でしかない。物質は極限までは進みはしないし、完全な孤立も決してあり得ない。科学が極限まで進み、孤立させるのは、研究の便宜のためである」(502-503)。引用に物質の「孤立的系を構成する傾向」とあるが、これは、系（科学）が作為的であるにしても、系の中にもある客観的な傾向があることを意味しているのではないだろうか。恐らく、その根源は流動する實在の弛緩と考えられる。
- 11) ベルクソニスムの流動する實在の持続的創造が、世界の存在と時間を産み出している。それに対しデカルトの連続創造説では、世界の存在は非連続な時間に沿って瞬間毎に神に創造され、世界の存在自体には創造的能力は認められない。
- 12) 幾何学的な系や秩序である科学が扱う物質観にあっても、その形成において我々精神の作為に大きな余地が残されている (cf.681)。それに対し、流動する實在の中の緊張の中断（弛緩）は我々の作為によらない実証性であり、むしろ科学の扱う物質の幾何学的秩序をつくる我々の作為の出発点であろう。

(大学院後期課程学生)